

令和2年度 後期全校集会

皆さん、おはようございます。先月の体育祭・文化祭と続いた前期の大きな学校行事では、みなさんと教職員が一丸となって本当に内容豊かな、立派なものを創り上げてくれました。ありがとう。そして、いよいよ後期のスタートです。3年生はまもなく入試本番。人生の大きな扉を開く瞬間が刻一刻と近づいています。妥協することなく第一志望貫徹を大きな目標としてください。2年生は11月末には研修旅行が控えています。残念ながらオーストラリアのケアンズには行けませんが、久米島の海で大きな自然の懐に抱かれてきてください。1年生は学校にも慣れ、伝統ある千里を継承する土台を築いてほしいと思います。さて先日、新聞で「ノーベル賞受賞者を囲むフォーラム～次世代へのメッセージ」という記事を読みました。昨年ノーベル化学賞を受賞した吉野彰さんと20年前に受賞した野依良治さんが福島県で講演を行ったというものです。2人は持続可能な社会を築くために科学が果たすべき役割や若い世代への期待を語っていました。吉野さんはロウソクの火が細長いのは温められた周りの空気が軽くなって上がっていくからだ。ところが、無重力の宇宙ステーションの中ではそうはならない。常識には必ず条件

がついていて、その条件を外すと、とんでもないことが起こる。常識という条件を外すことが独創的なアイデアにつながる一つの道筋であると述べられていました。また野依良治さんは現代は終わりの始まりと世界の人々は心配している。科学技術は人類に多大な貢献をしてきた。スマートフォンや自動車は、人間の能力をはるかに超えた。科学技術は人間に、能力の拡大と自由を与えた。しかしその一方、科学技術は社会に影ももたらした。プラスチックは物質文明を支える史上最大の科学的発明だが、環境汚染が大きな問題だ。ただプラスチックを従来の素材に替えると、エネルギーの消費や二酸化炭素の排出は増える。新素材の開発には様々な制約がある。お二人はこのような話を若者に向けてされていました。

いつもお話しているように物事には必ず、光と影があります。良い面と悪い面があります。絶対的に正しいと言えるようなことはありません。今回のコロナウイルス感染症も同じことです。日本は今のところ欧米に比べて、感染拡大を防げているように思えます。その要因は外出を控える、マスクをつけるといった個人の行動と店舗の営業制限といった対策の成果でしょう。ですから少し緩むとウイルスが力を取り戻します。そういう人間とウイルスのパワーバランス

スが今後も続いていくのでしょうか。コロナウイルス感染症では多くの方が亡くなり、マイナスの極みのような事象ですが、人間はこのコロナウイルス感染症により多くのことを学びました。自分たちの行動次第でコロナウイルスは抑えられる。人々が自らの集団的な力を実感できたのは大きな出来事です。今後、気候変動防止やプラスチックごみ対策などの取組にも波及していくことと思います。

皆さんは大学に行き、このコロナウイルスというマイナスの遺産の経験をそれぞれの立場で社会に貢献できるプラスのものへと転換してください。後期はそんなことも考えながら、教養を身に付けてもらいたいと思います。一人一人が様々な知識を身に付け、多くの体験をし、次のステージへと向かう準備をしてください。後期がそんな時間になることを祈って私の話を終えます。